

人外の医者は鎮守府に て嗤う

リント

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※一度リメイクします。申し訳ありません。

突如として海の底から現れた謎の生物「深海棲艦」

既存の兵器が一切効かない彼女らはまたたく間に制海権を奪い、人類を窮地に追い込んだ。しかし

まるで人類を救うかのように現れた「艦娘」という存在。

在りし日の戦艦の魂を宿す彼女らは人類と共に徐々に制海権を取り戻している。
だが・・・

この世には影ながらひっそりと暮らす人外達がいる。
そして、それらの怪我や病気を治す医者もいる。

その中の一人。シユタイン博士。

彼は軍の要請を受け提督として着任する。

がしかし、彼は俗にいうことの『変人』であつた・・・
「さあ、診察の時間です！」

高校生が書く駄文

割と有り触れたブラック鎮守府立て直しもの
オリキャラ多数とキャラ崩壊が起きてます。

主人公は変態です。

気に食わない方はブラウザバック推奨

誤字脱字矛盾多数なので、報告よろしくお願いします。

批判や評価募集中です。

目次

人外の医者は鎮守府にて嗤う

プロローグ

1

人物設定

10

日々

1 Y 帰ってもいいですか!?

13

1 S 殻付きの猫

26

1 K 大淀

40

人外の医者は鎮守府にて嗤う

プロローグ

とある地下街。店という店が軒並み閉店し、シャッター通りならぬシャッター街となったこの街を三人の男達が足早に歩いていた。此処にはおよそ似つかわしくない純白の制服に身を包んだ男達は、先を急ぐように、しかしなにかを探するように人気のない通りを進んでいく。その姿はどこか怯えのようなものがあつた。現に真ん中以外の男達は顔がこわばっている。

「はいか。」

ふと、真ん中の男が足を止めた。彼の目の前には鉄錆びた汚らしい扉。彼はなんのためらいもなくドアノブに手をかける。

「中佐殿。本当に此処に奴がいるのでしょうか？」

「自分にはここに人が住んでいるとは思えません。大本營の情報が間違っていたのでは？」

「さあな。だが賭けるしかしなない。奴が此処にいることを。」

そう言つて中佐と呼ばれた男は扉を開く

ギイイイ

扉は重くきしみ、ゆつくりと開いた。その先には

「いらつしやいませ〜」

「は〜」

少女がいた。白いナース服に足下まで伸びた艶のある黒髪の高校生くらいの少女が綺麗な姿勢で立っていた。啞然とする男達をよそにナース服の姿の少女は事務的に続ける。

「ご希望は診察ですか？治療ですか？お薬の処方ですか？診察をご希望の方は今しばらくお待ちください。治療の方は専用の用紙をお渡ししますから質問に答え、今しばらくお待ちください。お薬の方はお薬の銘柄を告げ今しばらくお待ちください。」

これらを一息で言い切った少女はニコニコと張り付いた笑みを浮かべ、一礼した。その姿は可憐で、そしてとてつもなく異常であった。やつとのことで中佐が驚きから立ち直り、本来の目的を思いだす。

「お嬢さん。一つ聞いてもいいかな？」

「はい、何でもしよう？」

「此処にシユタイン博士がいると聞いた。今、博士はいるのかね？」

「先生にご用ですか？」

える。」

全身まっ黒な服装に白衣を羽織った片目がねの男がいた。

「貴方がシユタイン博士？」

「いかにも。私がシユタインだ。もつとも、本名ではないがね。」

ニマニマと薄ら寒い笑みを浮かべるシユタイン。

「今のはなんだ!？」

「今の? ああ、マンドラゴラのことか。」

「マ、マンドラゴラ?」

「知らないのかね? 人の形をした根を持つ植物だ。万能薬になるので栽培してはいるが、いかんせん収穫しようとすると呼び声で収穫者を殺してしまうのでね。品種改良して何とか死なない程度にまで音量を落としましたが、まだまだ大きいようだ。しかしながら素晴らしい。あの美声は何時間聞いていても飽きない。それに」

「もう結構だ。」

「そうかね・・・」

長くなりかけたシユタインの話を中佐が切り本題に入る。シユタインは心無ししよんぼりしてパイプ椅子に座った。

「今日はシユタイン博士、貴方に依頼したいことがあつてやつて来た。」

しかし、中佐が静かにそれを咎める。

「しかし！」

「私は気にしていない。」

「・・・了解。」

不承不承といったように引き下がる男。それを見届けた中佐はシユタインに向き直る。

「シユタイン博士。この依頼は、人類の存亡に関わることだ。深海戦艦の侵攻で敗れた人類は制海権を失い窮地にたたさされている。幸い艦娘の出現で何とか盛り返してはいるが、状況は以前劣勢のまま。覆そうにも人手が足りない。そこで苦肉の策だが貴方の力を借りることを政府は決断した。我々はそれを伝えるためにここまで来たのだ。」

そう言つて中佐は大きい封筒をシユタインに渡す。

「数日後にはその場所に出立してもらいたい。ここから三つほど先の街だ。そこで提督として艦娘の指揮をとつてもらおう。いいな？」

「なるほど。なるほど。くくっ」

にやりと口を歪ませるシユタイン。その姿は悪魔が笑っているかのように不気味なものであつた。

「では、我々はこれで失礼する。」

「そうかね。道中気をつけたまえ。」

これで話は終わったとばかりに立ち上がる中佐。それを薄ら寒い笑みで見送るシュティン。両者は視線を一瞬交差させ、二度と合わせることはなかった。

「中佐。あれで良かったんですか？」

「ああ、あれでいい。だが・・・」

中佐は少し言い淀み、疑問を口にした

「彼は一体何者だったんだ？」

その問いに答えるものは誰もいない。他の二人も感じていたことだったから。大本営から確かかの資料はあった。だがそれは全て彼の『体質』や気質といった特徴的なものが殆どで、その情報ですら抽象的なものばかりだった

結局何も分からない。本人と会ってもその疑問は消えることはなく、むしろより深まったのだった

「一度調べてみるか・・・」

「ウヒヒ、そいつあくお勧めしないなあ。」

と、中佐の呟きに笑い声が返ってきた。気づけば、目の前に黒いレインコートを着て肌という肌を包帯でぐるぐる巻きにした赤目の少女がいた。

「調べるつもりがしなくとも師匠のことだろう？辞めとけ辞めとけ。あの人は調べても調べても拉致があかない。そうでなくても後ろ楯のないニンゲンが手をつつ込めば、あつという間に潰されるぜ？」

一方的に話すだけ話して通り過ぎていく少女。その間中佐達は一言もはつすること
はできなかつた。彼女の言葉に圧倒されたのではない。体勢に圧倒されたのだ。彼女
は

天井を歩いていたのだ。

ぺたりぺたりと足音をたて人が歩けるはずのない場所を歩き通り過ぎていく少女は、
何を思ったのか首だけを中佐達に向けた。

「どーしても知りたいんなら一つだけ教えといてやる。あの人がお前らの中でなんて呼
ばれてるかだ。」

ウヒヒ、と笑う少女。

『『人外の医者』だとさあ。』

そう言って少女は中佐達の前から消えた。文字通り忽然と消えてしまった。後に残されたのは、立ち尽くす中佐達と静寂だけであつた。

人物設定

シユタイン博士

上下真つ黒の服に白衣を羽織つた男。片目がねで長髪といういでたちなので、名前も相まってよく学者と間違えられる。年齢不詳で名前も偽名。見た目は三十代前半に見える。人外の医者を生業としていて、非公式ながら政府からも認められている。仕事柄、妖怪や精霊などに知り合いが多い。特殊な体質で、人外ともこの体質を生かし渡り歩いている。興味を持った生物は診察、解剖してみないと気が済まない、いわゆる変人。だが、対象が嫌がると途端に手を止める。変なところで紳士。気持ちが高ぶると「エクスレント!」と口癖を叫ぶ。好きなものは観察や解剖 嫌いなものは面白味のないもの。最近のマイブームは艦娘。

シエルキャット

黒いレインコートに包帯で全身ぐるぐる巻きになっている見た目中学生の少女。目は緋色。一人称が安定しない

。超気紛れ。言葉は男勝りな感じで、誰に対しても強気な態度をとる。レインコー

トのポケットにはいつも飴が入っている。叩くと増えるらしい。シユタインのことは
師匠と呼んで言うことを聞いてはいるが、敬ってはいない。自己満足優先主義。欲望に
忠実。頭で考えるよりも直感を信じ行動することが多い。いわゆるあほの子。好きな
ものは鬪いと飴 嫌いなものは活字 最近のマイブームは格闘ゲーム シユタインの
弟子その一

陽月 飽和

ナース服の女の子。黒髪を足下まで伸ばした十六歳の少女。ナース服は仕事柄の雰
囲気を出すため制服代わりに着ている。髪以外は特徴のない一般的な女子高校生。訳
あつて学校には行っていない。家族との仲は良かったが家からも飛び出してきている。
シユタインのことは先生と呼び、慕つてはいるが反面教師として捉えているところもあ
る。三人のなかでは最も常識人で真面目。なのでよく貧乏くじをひいたり、他の二人に
振り回される。なんだかんだで面倒見が良い。好きなものはスイーツ 嫌いなものは
虫 最近のマイブームは散歩 シユタインの弟子その二

人外達

上は神様から下は幽霊まで。多種多様な者達がシユタインを訪ねて来る。診察や治療を受けるために来る者、愚痴を話しにきたりただ遊びに来る者と、理由も様々。最近では弟子達目当てで訪ねて来る者もいるとか。普段は人に見つからないように人が滅多に来ないところで暮らしていたり、人に紛れて暮らしている。艦娘や深海棲艦へは、新しい種族低度の認識。シユタインが鎮守府に移動したため海に住んでいる者は移動が楽になったと喜び、逆の理由で山に住んでいる者は不満がっている。

日々

I Y 帰ってもいいですか!?

拝啓

お父さん お母さん お元気ですか？

私は今、タクシーに揺られてとある場所に向かっています。そして、

「・・・うう」

とつても泣きそうです・・・

理由は今朝の出来事。目が覚めると同時に、唐突に私の先生であるシュタイン博士が「拠点を変える。三十分で準備したまえ。」

と言い出しました。おかげで朝食もろくに食べてません。お腹減りました。

さらに驚いたのは新しい拠点先。鎮守府と呼ばれる深海棲艦から市民を守るために作られた前線基地だったのです。

か弱い女性が化け物と戦う前線基地へ。

ハハッ。冗談でしょう？

本気でしたよこんちくしょう。

「はあ……」

なかばあきらめがちにため息をつくど、

「どうかしたのかね。陽月君。ため息一つで座敷わらしが一人逃げていくそうだが?」

「逃げていくのは幸せだと思えます。」

ため息するたび座敷わらしに逃げられたらどこの家も一瞬で没落しそうです。

「そうともいう。」

この助手席からケラケラ笑う男こそ、私の先生であるシユタイン博士です。相変わらず全身真っ黒な服に白衣を羽織った謎のコーデイナー。手入れされていない髪は脱色されたかのように真っ白。肌も以上に白く、おかげでモノクロのような外見をしています。正直、夜中に会えば今でも怖いです。

そんな先生は助手席で知恵の輪を外したりかけ直したりを永遠と繰り返しています。なにが面白いんでしょうか?

「ウヒヒ、そう心配そんな顔すんなよ飽和あ。いざとなりやあこのシエルキャット様がみーんなぐちやぐちやにしてやつからさあ。」

そう過激なことを言うのは同僚のシエルキャットちゃん。略してシエルちゃん。黒いレインコートを羽織り、肌という肌を包帯で隠した不思議な女の子です。今は私の隣で紅い目を輝かせ、ゲーム機を操作し最近流行りの格闘ゲームに勤しんでいます。

ちなみに、なぜ先生だけ助手席なのかというと、持ってきていた荷物があまりにも多く、タクシーのトランクに入りきらずシエルちゃん隣の隣に山積みにされているから。

少し窮屈な思いをしながら外の景色を眺めていると、ふと、思い出すことがあります。た。

「先生、そういうえばあの人達に連絡しておかなくていいんですか？」

「彼らにはもう知らせてある。時期に訪ねにくるさ。」

彼ら。世間一般に妖怪や精霊などと呼ばれる存在。それを治療することが先生の、ひいては私達の仕事です。

と言つても、あのヒト達は滅多なことでは病気にはなりません。どちらかということ、相談や会話を楽しむために訪ねに来る人が多いのです。人の化かし方や日頃の愚痴、怪談話を広げて欲しいなんて依頼もあります。

たまに病気になったヒトや超能力や呪術にかかった人間が訪ねてきます。私もその一人。

私は普通の人よりも感度が異常に強いそうです。他の人よりも見え過ぎてしまう。聞こえ過ぎてしまう。感じ過ぎてしまう。ゆえにあの人達の温床になりやすい。それが私の病気。

おかげで私の周りでは、ポルターガイストなど不可思議な現象が多発。私自身も取り

憑かりれたり、脅かされたりして、散々な目にあつてきました。

この病気を治すために、半年前私は先生の元へ転がり込み、こうして弟子となつたのです。

キキイ

軽いブレーキ音がして、タクシーが止まりました。どうやら、目的地に着いたようです。先生がお会計を済ませている間、私達は持つてきた荷物を運び出します。つて重つ！うひゃあ！なんか出てきました!?!?ていうかシエルちゃん、飴食べてないで手伝つてください！

結局、運転手さんにも手伝つてもらつてなんとか運び出すことができました。疑われ

そうになったら「手品の道具です！」とか言つて、なんとか誤魔化しました。ちなみに、先生とシエルちゃんも自分の荷物以外は全く手伝つてくれませんでした。はあ・・・。

そんなわけで鎮守府前、私達の目の前にはレトロチックな建物がそびえ立っていました。何でしょうか。私はなんとなく秘密基地的な、近未来的な想像をしましたが、当てが外れましたね。赤いレンガで作られた建物はどことなく部外者を威圧しているように感じます。

「ここが第七鎮守府か。実に面白そうだ。」

意気揚々と眩く先生。

「ウヒヒ、楽しめそうだなあ」

不適に笑うシエルちゃん。

「帰りたい・・・」

半べその私。

端から見れば通報待ったなしの光景です。

しかし幸いにも、そんな私達を中の人々が怪しんだのか、私達の来訪を拒むように鎮守府の門は閉まっていました。

やりました！これで帰る口実ができました！あとは説得あるのみ！

「ほ、ほら先生。私達はお呼びじゃないって・・・」

「確かこれが門の鍵だったか。」

何でそんな鍵持っているのですか。

先生が唐突に取り出した鍵で門はすんなりと開いてしまいました。

「さあ、ここの住民に会いにいかうではないか。」

先生の用意周到さがこんな時には恨めしい。

「何時までも怯えてんじやねえよ。ここには艦娘共もいるんだ。命は、まあ大丈夫だろ。」

艦娘。深海棲艦に唯一対抗できる存在。彼女たちも、深海棲艦と同じく突如として現れたが、人に味方して深海棲艦と戦っている、らしい。というのも、私達民間人は戦況の優劣しか伝えられず、その情報も事態は好転しているの一点張り。艦娘自体のことはあまり語られていないのです。そんなことも相まって、艦娘は深海棲艦と同じ化け物ではないか? という噂もまことしやかに語られているのでした。

でも確かに、艦娘が人類を守護していることは事実。多少は安心してもいいかもしれませぬ。

恐る恐るですが、先生の後が続いて行きます。

しかしここでシエルちゃんがおもむろにクラウチングスタートの構えをとり始めました。

「んじや、先行つてるぜえ」

そう言つてシエルちゃんはあるつという間に鎮守府の入り口まで走つて行きました。あ、相変わらずとんでもない速さです。本当に文字通りあつという間です。

「では、我々も行くぞ。」

「は、はい。」

先生に答え私も構えをとり、なぜか襟首を掴まれました？

「へ？」

そして、そのまま猫のようにつままれ、ものすごい勢いで歩き出されました。先生は普通の人が走る以上の速さで歩くことができます。

「うひゃあああああ!!!」

視界がグワングワンと揺れ、一気に酔いそうになります。実際に過ぎた時間は十秒かからない程度でしょうが私には一時間以上に感じました。

おかげで揺れが止まっても視界は揺れっぱなしでした。おえつ。

「ふむ、なかなかの速さだ。約二秒といったところか。」

そう言つて先生は私を離しました。いえ、落としましたといった方が近いかもしれません。前触れなく落とすので、盛大に地面に頭をぶつけました。私は頭を抱えて悶絶します。しかし当然のように誰にも気付かれませんでした。完全に空気扱いです。私を

落とした先生は・・・あ、これ完全に私のこと忘れてますね。

私が地味に落ち込んでいる間にも話は進みます。

「ふむ、君が艦娘かね?」

「はい。私は軽巡洋艦大淀型一番艦の大淀です。あなたが新しく着任される提督ですな?」

「いかにも、私が新しく」さっそくですが講堂にて着任式を行います。講堂までご案内しますのので着いてきてください。」

「ふむ、面倒だな。パスできないのかな?」

「無理です。」

そう言って大淀さんは、先に行ってしまった。ついて行きますけど、何だかいやな予感がありました。ここから先には行ってはいけないというような予感。

「どーすんだ?」

「行ってみるとしよう。なにやら良い予感がする。」

「へえ。」

先生が予感した時点で確実に何か起きますね。これ。それも多分かなり危ない気がします。

「あの、本当に行くんですか?」

「あ、いたの?」

「最初からいましたー!!!」

気づいていましたけれど!改めて言われると傷つきます。じゃなくて!

「何だかともいやかな予感がするんですが!」

「いつものことだ。問題はない。」

「そーそー。つべこべ言わずに行くぞー」

ああ、願わくばこの先何事もなく終わりますように。

「ここが講堂です。どうぞ、お入りください。」

そう言つて大淀さんが扉を開けてくれました。中に入ると、小学生くらいの子どもから大学生くらいの人まで色んな人達が見、睨みつけていました。

こ、怖い。何で全員敵意むき出しなんですか。あの、私達なにか悪いことしましたか?なんて聞ける空気じゃないです。震え出した体を必死に動かして何とか講堂の中央まで行きます。

そこまで行くと大淀さんが講堂の扉を閉めます。ああ、唯一の脱走経路が!そろりと大淀さんの方を見ると物凄い眼力で睨みつけられました。怖いので速攻で前を向きま

す。

「ふむ、ではまずは「全機発艦!!」……これは何の真似かね?」

先生の話を遮り出て来たものは戦闘機のミニチュアみたいなもの。ついでに小中生くらいの子達は一齐に砲台つばい何かをこちらに向けてきます。

あれ?これはもしかして絶体絶命な状況では?おかしいですね。着任式と言うくらいですから歓迎会的なものだと思っていたのに。そうじゃなくても艦娘は人間の味方のはずなんですよね?なんで敵意むき出しなんですかね!?

「何の真似と言われましても、見た通りです。私達の鎮守府に『提督』という役職を持つ人間は必要ありません。大変心苦しいですが、あなた達をここで『処分』させていただきます。遺言程度なら聞きますよ?」

それ遠回しに死ねって言ってますね?彼女達は どうしてそこまで私達を——
「エエエエエエクスレント!!!」

うわつ?!突然先生が興奮した様子で叫び声をあげました。……何がこの人の琴線に触れたのでしょうか?

「処分?私を?この私をかね?面白い!実に愉快だ!私は今までこんな挨拶はされたことがない!良かろう!やってみたまえ。言っておくが私は——」

その時、講堂内に一発の轟音が鳴り響きました。そして、私の顔にかかる生暖かいも

の。倒れていく先生がやけに遅く感じました。

撃つたのは目つきが鋭い中学生くらいの子。その子は私達を怨敵を見るかのように睨みつけてます。

その瞳に私は瞬時に悟りました。

このままだと確実に死にます!!!!

どどどどどうすれば!? 命乞い? しても助かる雰囲気じゃありません。出口まで走って逃げる? あ、大淀さんにながちり固められているんです。この場にいる艦娘全員を制圧する? ひ弱な私にできる訳がないでしょうが!

私が頭の中でわちゃわちゃ考えているうちに、大淀さんが腕を上げます。いよいよ時間なくなってしまうました。もうこうなったらあの力を使うしかありません。私は大きく息を吸い込みました。そして、

「管狐!!」

叫びました!すると私の背後から、鼠と狐を足して二つに割ったような動物が飛び出てきました。これは私が飼っている妖怪管狐。総勢七十二匹の獣が講堂内の艦載機を片っ端からたたき落としていきます。私はその様子を見ることなく、続け様に自身の力を解き放ちます。

その瞬間、私の目は暗闇に閉ざされました。何も聞こえません。たった一人の暗黒の

世界。とどめとばかりに全身の力が抜けていきます。代わりにまるで長時間全力で運動したかのような倦怠感と疲労感が襲いかかりました。

これは私がこの半年で先生の職場で生き残るために編み出した力。私がつけている病気の応用とも言えます。

これを使えば限定的に私が遭ったヒト達の力を発動できるのです。ただし、デメリツトもあります。一つ、使えば私の体力を根こそぎ持つて行くこと。二つ、制御ができないこと。三つ、そのヒトの特性を追体験してしまうこと。この不利過ぎるデメリツト達のお陰で、この力は私にとっての切り札的な力なのです。

今発動している力は夜雀という山道で人の目と耳を塞ぎ迷わせる妖怪。なので私も目と耳が使えなくなります。肌に触れる風や辺りに広がる硝煙の匂いに体を強張らせながら嵐が過ぎ去るのを待ちます。

咄嗟に思いついたとはいえ何でこんな力を選んできましたのでしょうか。もう少し状況に適した力にすればよかったです。これいつ流れ弾に当たって死んでもおかしくないじゃないですか。

そんなことを考えていると不意に、私の首に強い衝撃が走り、意識が遠のいていくのを感じました。

私、遂に死ぬんだ。お父さんお母さんごめんなさい。

最後に心の中で両親に謝り、私の意識は暗闇に沈みました。

ああ、来世は、ちゃんとした、普通の、女の子に、なり……た……い……な……。

1 S 殻付きの猫

私ことシエルキヤットは、いろいろと変な奴だ。自分でも訳が分からない位気紛れで、戦闘狂で、餡が好きで、一人称が定まらなくて、上から目線で、なによりニンゲンじゃない。俺ですら分かってないことが多すぎていやになりそうだ。だから今から語られるこの物語はわしが我自身を知る為にわっちが定まらない一人称を駆使して語る阿呆丸出しの殻付き猫（シエルキヤット）観察記録だったりする。

今日は朝から騒々しい。師匠の馬鹿が唐突に引越し宣言をしたからだ。

引越し先は、鎮守府とかいう所。どうやら艦娘共がニンゲンを守るために使う住処らしい。そこで深海棲艦を食い止めているとか。何でいきなりそんなところに住む気になったかは知らんが、師匠の突拍子のない言動はいつものことだ。面白そうだからついて行ってやろう。

そんなわけで、今はタクシーの中、何気に私はこれでタクシー初乗りだ。まあ興奮したのは最初だけで、今はオンラインで楽しめる格闘ゲームに勤しんでいる。名前は忘れた。今回の敵はなかなか強い。

「はあ……」

隣で何だか泣きそうな顔してため息をつくのは、半年前に同僚になった陽月 飽和（ようづき ほうわ）なっが黒髪以外は全く特徴のない顔つきに、ごく一般的などこにでもいそうな体つき。平均を地でいく女。あたしは心の中でそう呼んでいる。

「どうかしたのかね。陽月君。ため息一つで座敷わらしが一人逃げていくそうだが？」

それに独特の声かけをする。師匠のシユタイン。相変わらず、全身真っ黒なセンスのない服に白衣を羽織る謎のコーデイネート。髪も肌も真っ白けだから、まるでモノクロ写真がそのまま額縁から抜け出したみたいな感じになってやがる。

「それは幸せだと思えます。」

とツツコミ担当

「そうともいう。」

とボケ担当

この二人は出会ってからずっとこういう漫才コンビみたいな立ち位置にいる。ちなみにうちは合の手担当。楽でいいぜ。

まあ、何時までも同僚が不安そうな顔をしているのはさすがに可哀想だ。いつちよ、励ましてやろう。

「ウヒヒ、そう心配そうな顔すんなよ飽和あ。いざとなったらこのシエルキャット様がゼーいんぐちやぐちやにしてやつからよお。」

なんかさらになしかめっ面が深まった。何でだ。

バキリ

ゲーム機の方から嫌な音が響く。見れば、プレイキャラの体力が四分の一をきつていた！

ちよ！ふざけんな！何でこんなに削られてんだよ!?立て直せ立て直せ!まだ間に合う!うおつ!!ここで必殺使つてくんのかよ!だが、ここを凌げばまだ勝ちはある!ウオオオオ!!唸れ俺の右手ええええ!!

『You Lost』

負けた。やっぱりあの体力差を覆すのは厳しかった。あー悔しい！でも楽しかった
なあ

そうやって鬨いの余韻に浸っていると

キキイ

タクシーが止まった。どうやら目的地に着いたようだ。

さて、降りるとしますか。あたいは自分の分の荷物を取ってタクシーを降りる。何故か飽和が恨めしそうにこつちを睨んでいたが、特に気にしない。

飽和が運転手と協力して荷物を運び出すのを待ってから鎮守府に向きなおる。真つ赤なレンガ作りの建物は今まで見たどんな建物よりもゴツゴツしていて、古くさく、い
わいるレトロチックってやつ何だろう。

だが、オレが気になったのは外見的なことではない。匂い。血と硝煙、なにより殺
気の匂いに満ちあふれていやがった。

「ここが第七鎮守府か。実に面白そうだな。」

「どうやら、師匠も同じ匂いを嗅ぎつけたらしい。口が下の方向に弓なりに歪んでやがる。」

「ウヒヒ、楽しめそうだなあ。」

「きつと妾も同じ顔をしているんだろう。楽しみで仕方ない。今にも飛び出して行きそうだな。」

「帰りたいたい……」

泣きそうな顔をしている飽和。あいつは気付いていなさそうだな。それでも帰りたがるのは、ここが前線基地だから命の危険があるとか考えているからだろう。今更考えても無駄だと思うがな。

「ご丁寧に鎮守府前の門は堅く閉ざされていた。艦娘共が閉めたのか、前任のやつが閉めたのか、どうでもいいがとつととぶつ壊して入るか。」

「ほ、ほら先生。私達はお呼びじゃないって……」

「この後にも及んでまだ諦めの付かない我が同僚。いい加減希望は捨てた方がいいのになあ。」

「確かこれが門の鍵だったか。」

「持っているとは思った。確実に飽和の逃げ道を塞いでいく師匠。その横で絶望しか」

けた顔をしている飽和。予想通りの展開だった。あとは僕たちがこの中に入れば飽和も勝手について来るだろう。

「さあ、この住民に会いに行こうではないか。」

意気揚々と入っていく師匠。うじうじしている飽和ももう見飽きたから、励ましも兼ねて声をかけてやる。

「何時までも怯えてんじゃねえよ。ここには艦娘共もいるんだ。命は、まあ大丈夫だろ。」

「このやつらがどうかは知らねえけど」

「んじゃ、先行つてるぜえ。」

そう言つて私は走り出す構えをとる。なんて言つたかな？ 確か、クラウチングスタートとかいう構えだ。

よーい ドン

一直線に走り抜け、建物の入り口で止まる。かかった時間はだいたい二秒程度か。距離も短かつたし、こんなものか。

ふと、横を見ると鉄仮面みたいな無表情で眼鏡をかけた女が目だけを丸くしてこつちを、つまりはオレを見ていた。とりあえず、笑つとくか。ウヒヒ。

「ふむ、なかなかの速さだ。約二秒といったところか。」

いつの間にか背後に師匠が立っていた。相変わらずの神出鬼没っぷりだぜ。我にこ
うも気配を感じさせないのはおそらく師匠しかいない。眼鏡女は師匠を見て、また目を
丸くしている。表情は全く動いていない。なんかすげえな。

「ふむ、君が艦娘かね？」

「はい。私は軽巡洋艦大淀型一番艦の大淀です。あなたが新しく着任される提督です
ね？」

「どうやらこの眼鏡女は大淀という名前らしい。」

「いかにも、私が新しく」さっそくですが講堂にて着任式を行います。講堂までご案内
しますので着いてきてください。」

師匠を遮って大淀は先に歩き始めた。しかし当の本人である師匠はというと、

「ふむ、面倒だな。パスできないのかね？」

まあ、師匠の性格からしたらそう言うよなあ。

「無理です。」

大淀がきつぱりと言った。だがその声は若干震えていた。大方師匠の言葉に驚いて
いるんだろう。あいつ真面目そうでもないな。

「どーすんだ？」

「行ってみるとしよう。なにやら良い予感がする。」

「へえ。」

それはそれは。師匠の勘はよく当たる。とつつつても面白そうだ。

「あの、本当に行くんですか？」

「あ、いたの？」

「最初からいきましたー!!!」

完全に忘れてた。

がつくりと膝をついてショックを表す飽和。だがすぐに立ち直りやがった。つまんね。

「引き返しましょう！わざわざ罫にかかりに行くことないじゃないですか！」

だがよお飽和、アタイ達はそんなことは端っから分かってんだ。そこに敢えて行くのが楽しいんだろう？

というわけで俺達は飽和の制止を無視して講堂に向かった。

「ここが講堂です。どうぞ、お入りください。」

大淀に促され講堂の中に入ると、艦娘がたくさんいた。ちっちゃい奴からでつけえ奴まで、いろいろな艦娘がよりどりみどり。しかも、その全員がギラギラとした殺意を俺たちに向けてきている。

「・・・ウヒツ」

おかげで興奮して小さく笑ってしまったじやないか。

講堂の中央まで行くと、大淀が扉を閉める。

「ふむ、ではまずは「全機発艦!!」・・・これは何の真似かね？」

師匠の自己紹介は発艦の合図に遮られた。講堂全体に艦載機が展開され、ついでにちび達がこつちに主砲を向けている。いいねえやる気に溢れている。

「何の真似といわれましても、見た通りです。私達の鎮守府に『提督』という役職を持つ人間は要りません。大変心苦しいのですが、あなた達をここで『処分』させていただきます。遺言程度なら聞きますよ？」

平たく言えば、邪魔だから死ね。といたいわけだ。だがその脅し文句が逆効果だ。

「エエエエエクスント!!」

思った通り、師匠はテンションが上がって叫んだ。自分への殺害予告にここまで盛り上がる奴は古今東西師匠だけだろうな。興奮したままの師匠はそのまままくしたてる。

「処分？私を？この私をかね？面白い！実に愉快だ！私は今までこんな挨拶されたこと

がない！良からう！やってみたまえ！言っておくが私は——」

あ、一番大事なところで師匠の胸に穴が開いた。ゆつくりと笑顔で後ろへ倒れる師匠。撃つたのはピンク髪が目つきがやべー奴。汚物をみるかのようにこつちを睨みつけてきているな。おお、こわ。

それにしても、あつさり死んでしまうとは私の師匠は情けない。とりあえず心の中で合掌しといた。

そして、大淀が手を振り上げている。あれが振り下ろされる時が攻撃の合図だな。振り下ろされた瞬間、ここにいる全員をぐちやぐちやにしてやる。さあ今！早く！さあさあさあさ

「管狐!!」

あ?!いきなり飽和が叫んだ。しかし、俺が驚いたのはそこじゃない。飽和が叫んだ瞬間、飽和の荷物から狐と鼠を足して割った変な生き物が飛び出したことだ。あれは確か管狐とか言う飽和のペットだな。いつの間が増えたのか前みた時より多くなっている。

管狐達は講堂内を縦横無尽に駆け回り、艦載機をたたき落としていく。艦娘どもは突然のことに慌てふためきながら管狐達を撃墜しようとするが、予想以上のすばしっこさととらえきれない。

そんな艦娘どもに追い打ちをかけようとしたその時、またも飽和が動く。今度は自分

ふと見れば、師匠が大淀の首を絞めていた。見るからに本気で絞めていない。逃がさないためだ。てか、師匠いつの間に復活したんだよ。ま、どうでもいいけど。

「お、師匠。やっと復活したのか。この部屋の艦娘と飽和は無力化は終わったぜ。」

「傷は？」

まず確認することがそのことなのがいっつらしい。当然分かっていたことだ。

「最小限になるように気をつけた。」

多少は見えないところが痛んでいるかもだが問題ないだろう。師匠も理解しているように。

「よろしい。では、大淀君。君が考えている疑問について答えよう。ついでに、そこで盗撮している者達にも。」

師匠も気づいていたのか。講堂の窓の外からずっと視線を感じていた。恐らく航空戦艦の艦載機かなにかだろう。

「確かに私は一度死んだ。君達の攻撃は紛れもなく私の胸に綺麗な風穴を開け、心臓と肺を跡形もなく吹き飛ばした。しかし！私はこの通り生きています。それは何故か。それは私の『体質』にある。」

『体質』、ねえ。オレ様はあれのことは『力』と呼んでいる。『体質』なんて呼び方は生ぬるい。『病氣』なんていうマイナスなものでもない。あれは『力』だ。たとえ条件付きで

も、デメリットがあつたとしても、こいつらが持つてゐるものはれつきとした『力』だ。「私の『体質』は『万物改変』!! あらゆるものを作り替える『体質』! 先ほどは私の死そのものを改変し、無かつたことにしたので。私が望めば大淀君、君の存在すら作り替えることができる。これがどういう意味か、賢い君は分かるだろう?」

ほら、なんだそれといえるチートじみた『力』だ。これが本当に『体質』なら、今頃世の中は化け物だらけになっている。そんなこととづくに分かつていて、それでもなおそう言いつづける師匠はなにか理由があるのかもしれない。でも詮索はしない。師匠とアタイのルールだ。

さて、師匠が大淀を脅したところで、自己紹介をしよう。どうせ、ここに住むのは確定したようなものだろう。師匠の恐ろしさは伝わったか? 師匠が改変できないものはない。つまり、この鎮守府を作り替え、無かつたことにすることも可能な訳だが、観ていた奴らは果たしてその結論に辿り着けるかどうか。まあ辿り着けなくて襲いかかつてきても、地獄を見ることになるだけだけだな。

「クヒヒ、んじゃまあこれからお世話になるんだ。自己紹介しとくぜ。オレ様はシエルキヤット。んで、私の腕の中で伸びているこいつは陽月 飽和。よろしくな。」

親愛を込めてにつこり笑う。すると大淀の顔が引きつった。なぜ?

「私の名はシュタイン!! 修羅神仏魑魅魍魎の医者であり、彼らの不可思議を解き明かさ

んとする愚者である。この度海軍から依頼されてこの鎮守府に着任した提督牽軍医。人は私のことを『人外の医者』と呼ぶ。」

さてさて、ここじやどんなことが起きるのか。我は期待に胸を高鳴らせて口を弓なりに歪ませるのだった。

1
K
大淀

『本日ヒトヒトマルマルヨリ新タナ提督ガ着任スル。早急ニ艦隊ヲ編成シ敵ヲ撲滅セヨ。』

大本営からの電報が届いたのは今朝、朝日が上つてすぐのことだった。どうやら性懲りもなく新しい提督を派遣したらしい。もういい加減私達のこととは放っておいて欲しい。

この鎮守府をとつとと解体する方が楽なもののだが、そうしないのは深海棲艦の攻撃が激しく、今はどこの鎮守府も私達を受け入れることが出来ないからだろう。大本営の方も今のタイミングで敵を攻撃できる拠点を失いたくはないらしい。かまっている余裕もないとみえる。

何にせよ、私達がやることは変わらない。

「今度は、追い返しましょうか？」

一体何回目だろうか。

中には私達を本気で救おうとした人達もいるかもしれない。

でも、もう無理だ。

私は、私達はもう、人を信じられない。

「大淀。何かあったか？」

執務室から出た所で、長門さんと出会った。私が電報の内容を話すと、途端に顔が陰しくなる。

「そうか。また、やって来るのか。」

「作戦はいつもの通りでいいですか？」

「ああ、講堂で空母と軽巡洋艦、駆逐艦で一斉射撃。重巡洋艦と戦艦は逃げられないように廊下を塞ぐんだらう？」

「はい。よろしくお願いします。」

「任せろ。ただでは帰さん。」

変なことはいらない。私達の意志を新しく来た人達に知らしめるただの儀式だ。

お前らは必要ない。

そう言外に大本営に示すだけの儀式。

それに今は戦時中、不慮の事故はつきものだ。例えその結果が新しい提督の命を奪うことになってしまったとしても、私達が事故だと言いはれば事故になり、たいした追求もない。後に残るのは失踪か事故死という大本営の判定だ。

だから、今から来る人間もそうやって無意味に消えていくんだ。

『鎮守府内にいる全ての艦娘に通達します。本日ヒトヒトマルマルより対提督用作戦を発令します。重巡洋艦、戦艦は鎮守府前に。空母と軽巡洋艦、駆逐艦は講堂に集合してください。繰り返します—』

鎮守府内に響いたのは霧島さんの声。どうやら、長門さんが先ほど話したことを早速伝えたようだ。

「さて、私も行かないと。」

講堂まで誘導するのは私の役目。

持ち場に向かう間、すれ違う艦娘達の顔は様々だ。

恐怖に怯える顔

怒りや憎しみに歪む顔。

この場所を守ると決めた意志のある顔。

・・・私はどんな顔をしているのだろう。

今の現状に何も感じていない私は一体いつ、顔を動かすことをやめたのだろうか。

いや、今考えるべきことじゃない。今はここを守り抜くことだけを考えてみよう。

ここを、もう二度とあんな地獄に変えないために。

鎮守府の前に一台のタクシーが停まる。きつとあの中に提督が乗っているのだろう。

「全艦に通達。『提督』が来ました。」

しかし、降りてきたのは白衣を着た長身の男と女性、それも子どもが二人。ナース服の少女とレインコートを着た少女。軍服を着た人物は見あたらない。

間違いだったのか？そんな疑問が頭をよぎる。

しかし、その三人の間は荷物をタクシーから下ろし終わると、関係者しか開けられない鎮守府の門を開き、さも当然のようにこちらに向かって来るではないか

信じられないが、彼らが新しい提督らしい。

すると、レインコートを着た少女が、おもむろにクラウチングスタートの構えを取り、こちらに走ってきた。否、走り終えた。約二秒。それが彼女が私の目の前に現れるまでの時間だった。わけがわからない。彼女は人間なのか？思わず目を丸くして注視してしまつた。視線に気づいた少女が獰猛な笑みを見せる。

「ふむ、なかなかの速さだ。約二秒といつたところか。」

いつの間にか男が目の前に現れていた。全く気配を感じられず、男が声を発するまで

気が付かなかつた。少女も異常だが、この男も異常だ。その男が私に目を向けた。何か見透かされている気分になる目だ。

「ふむ、君が艦娘かね？」

「はい。私は軽巡洋艦大淀型一番艦の大淀です。あなたが新しく着任される提督ですね。」

「いかにも、私が新しく」さつそくですが講堂にて着任式を行います。講堂までご案内しますので着いてきてください。」

男の言葉を遮り講堂に向けて歩きます。上官に対してあるまじき態度。今まできた男たちは、怒鳴りつけたり呆れたりした。中には殴りつけてきた男もいた。この男はどうだろうか？

「ふむ、面倒だな。パスできないのかね？」

なっ!?

いきなり何を言い出しているんだこの男は！着任式は部下や妖精さん達と最初に顔を合わせ、自身を上官として認識させる場だ。それを面倒という理由で欠席しようとするなんて。なんにせよこのままでは私達の計画が失敗してしまう。

「無理です。」

私の声は動揺を隠せていただろうか。嫌な予感がして私は自然と足を早める。後ろ

から男が少女と話ながらついてくる。途中から、もう一人会話に加わりより喧しくなる。会話の内容は聞かないようにした。どうせこれから死ぬ人達の戯れ言だ。気にはならない。否、気にしてはならない。

「ここが講堂です。どうぞ、お入りください。」

講堂の扉を開けば、予定通り他の皆が待機していた。

男達は何にも疑う素振りを見せず講堂の中に入っていく。中央の逃げられない場所まで進んだところで私も入り後ろ手に扉を閉める。これで彼らに逃げ道はなくなった。

ナース服の少女が扉が閉まる音に驚いたように肩を震わせて、恐る恐るこちらを見てきたが私と目が合うとすぐに元に戻した。気が付かれた？

「ふむ、ではまずは「全機発艦!!」・・・これは何の真似かね？」

男の言葉を遮り、赤城さんの号令で空母の皆が一斉に艦載機を講堂内に展開する。さ

らに、駆逐艦と軽巡洋艦は膝立ちで各主砲を彼らに向けた。

「何の真似といわれましても、見た通りです。私達の鎮守府に『提督』という役職を持つ人間は必要ありません。大変心苦しいのですが、あなた達をここで『処分』させていただきます。遺言程度なら聞きますよ?」

今まで来た人達は命乞いや罵声など無様な姿で消えていった。どうせこの人達もすぐに自らの本性をさらけ出すは・・・

「エエエエエクスント!!!」

「っ!?!」

笑った!?!困惑する私達をよそに男は腹を抱えて笑い続ける。

「処分? 私を? この私をかね? 面白い! 実に愉快だ! 私は今までこんな挨拶はされたことがない! 良かろう! やってみたまえ! 言っておくが私は——」

その時、一発の砲撃音が響いた。それと同時に男の胸の中央に風穴が開いた。男は笑顔で、ゆっくりとそのまま後ろへ倒れた。

音がした方を見れば、駆逐艦の不知火が持っている砲台から煙がでていいる。彼女は眉間にしわを寄せ、気味の悪いものをみるかのように男の死体を睨みつけていた。

静寂が辺りを包み込む。ナース服の少女は男の死体をゆっくりと確認し、恐怖したのか体が震え出した。対照的に、レインコートを着た少女はこちらを見て楽しそうに笑っ

ている。

こうなつては彼女達は生かして帰す訳にもいかない。私は腕を振り上げて、ふと考えてしまった。彼女等は彼とどういった関係なのかを。年端もいかないこの二人はもしかしたら新しく実装される艦娘なのではないのかと。そうでなくても、軍とは関係なく連れて来られたのではないかと。

その瞬間だった。

「管狐!!」

ナース服の少女が叫び、背後から何かがたくさん飛び出した。

それは狐と鼠を掛け合わせたような生物で、とてつもない速さで講堂内の艦載機をたき落としていく。翼をせずに飛ぶ姿は異様。鉄でできた艦載機をいとも容易く噛み砕く様は恐ろしい。駆逐艦や異変に気づいた艦載機が撃ち落とそうとするも全て躲されてしまう。

あれは一体何なのか。そう思う間もなく異変は続く。

「きゃあああああ!!!」

「何?!何なの!?!」

「皆!皆どこ?!?!」

「何も見えない!聞こえない!いやああああ!!」

今度は講堂一面に烏のような黒い羽根が飛び散った。それに触れた艦娘が訳の分からないことを言いだし取り乱し始めた。まるで突然耳と目が使えなくなったように暴れまわる。抑えようにも次々と降ってくる羽根に瞬く間に被害が拡大していく。このままだといずれ私も・・・

「っ!?!」

突然背後から首を絞められる。羽根を意識し過ぎて周りの警戒を忘れていた。おそらくはレインコートを着た少女だ。こうなったら一か八か至近距離で主砲を叩き込めば!

「動かない方が身のためだ。こちらは君の体の作りが人と同じならすぐに首をへし折ることができる。」

「!?!」

後ろから聞こえるはずのない声が聞こえた。おかしい!彼はついさつき倒したはずなのになんで私の後ろで動いている!?!不知火の攻撃が効かなかった? いやそんな訳がない。だって彼は人間だ。倒れていくところも見た。では聞き間違い? 空耳? それも違う。この空間に男は一人しかいない。ではなぜ彼は生きている!?!

「お、師匠。やっと復活したのか。この部屋の艦娘と飽和の無力化は終わったぜ。」

レインコートを着た少女がナース服の少女を抱えて私の前に立つ。気付けば他の皆

は軒並み気絶して、意識があるのは私だけになっていた。黒い羽根も降り止んでいた。

「傷は？」

「最小限になるよう気をつけた。」

「よろしい。では、大淀君。君が考えている疑問について答えよう。ついでに、そこで盗撮している者達にも。」

おそらく航空巡洋艦の放っていた偵察機のことだ。講堂の窓の外から見ていたのにいつばれたのか。しかし、男はまるで気にしていないように話始める。

「私は確かに一度死んだ。君達の攻撃は紛れもなく私の胸に綺麗な風穴を開け、心臓と肺を跡形もなく吹き飛ばした。しかし！私はこの通り生きている。それは何故か。それは私の『体質』にある。」

そこで男は一呼吸し、言った。

「私の『体質』は『万物改変』!!あらゆるものを作り替える『体質』！先ほどは私の死そのものを改変し、無かったことにしたのだ。私が望めば大淀君、君の存在すら作り替えることができる。これがどういう意味か、賢い君は分かるだろう？」

・・・何だ。何なんだその出鱈目な体質は!?!あり得ない！あつて良いはずがない！嘘だと思いたかった。でもそれだとこの男が生きている説明がつかない。結局はこの男が化け物に変わりない。私にはもう後ろの男が化け物に見えて仕方なかった。化け物

に首を掴まれて、命を握られていることが恐ろしかった。

そして、レインコートの少女が何が面白いのか鋭い歯を出して獰猛に笑う。

「クヒヒ、んじゃまあこれからお世話になるんだ。自己紹介しとくぜ。オレ様はシエルキヤット。んで、私の腕の中で伸びてるこいつは陽月 飽和。よろしくな。」

そして男は仰々しく白衣を翻した。

「私の名はシユタイン!! 修羅神仏魑魅魍魎の医者であり、彼らの不可思議を解き明かさんと志す愚者である。この度海軍から依頼されてこの鎮守府に着任した提督牽軍医。人は私のことをこう呼ぶ。」

私は、これから来る地獄に恐怖し、

「『人外の医者』」

そしてそれ以外の『なにか』を感じていた。